高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.4

●写真提供／山内敏男氏

リレー随筆④　田中貢太郎への愛着 —— 紅野敏郎

田中貢太郎の存在を強く意識したのは、彼が田岡嶺雲や大町桂月らの周辺人物としてきわめて重要と思ったとき以降である。

さらにいえば井伏鱒二とのつながりの強さが加わってくる。田中貢太郎の代表的作品として『旋風時代』があり、その新聞紙上の挿絵は河野通勢がみごとに描き、ついで単行本となったときも、河野通勢の目を見はるような装幀であったため、感銘を受けたことも思い出される。

岸田劉生の「草土社」より出発した河野通勢の画家としての力量も相当なもので、その再評価もはじまっているが、長与善郎の『項羽と劉生』と田中貢太郎の『旋風時代』の挿絵や装幀は、同じく「草土社」より出た木村荘八の『墨東綺譚』（永井荷風）の挿絵などとともに、文学と美術の接点をさぐっていくとき、逸することの出来ぬ歴史的意義をはらんでいる。

「白樺」関係の勉強をひとつの軸としている私にとって、劉生―荘八―通勢は、当然視野のなかに入ってくるが、そのとき田中貢太郎にまでコトはおのずと及んでいく。

田中貢太郎が中心になった「桂月」という薄い小さな雑誌に、井伏鱒二はのちの名作「鯉」の原形となるエッセイを発表している。随筆「鯉」が短編「鯉」に昇華していく経緯―そこに井伏の早稲田時代の友人青木南八とともに、土佐の酒仙田中貢太郎がゆったりと構えている風景は、なかなかのみものといってよかろう。

井伏の名作「へんろう宿」も、田中貢太郎の危篤という事実は伏せられているが、ユーモアとペーソスの入りまじった、庶民の生きていく非情の知恵の総和として、私は幾度も講義のなかで朗読してきた。朗読することで、「酒」は「しわのばし」によいという言葉が体にしみついたし、土佐弁の不思議なおもしろさに触れた。この短編が「オール讀物」に掲載されたときの挿絵が、横山隆一だということを力を込めて語ったのが、安岡章太郎であった。田中貢太郎―井伏鱒二―横山隆一、そして安岡章太郎というラインも、土佐を媒介にすることによって、一段とふくらみが出てくる。

井伏の「多甚古村」の表題のかたわらに、

　干潟にはささら波梅の村に入る

という俳句がはめ込められている。はじめはだれの俳句かとまどったが、これが田中貢太郎の作とわかり、田中の本をすべて集めてみようという気が生じた。まだ「岡崎巷説」などが入手出来ぬが、高知の文学館、県立図書館などで見せていただいた。その他はほぼ集めたと思っている。それまでに幾年かかったことか。田中貢太郎も「中央公論」の名編集長瀧田樗陰によって場所を与えられた人である。「創作欄」の書き手というよりは「説苑欄」の書き手としてであったが、この「説苑欄」こそが、「中央公論」の「論説欄」と「創作欄」とをつなぐ三本柱の役割を果たしたのだ。

（早大名誉教授・山梨県立文学館館長・日本近代文学館常任理事）

高知県立文学館

◆次回企画展によせて◆

司馬遼太郎展

―十九世紀の青春群像―

会期―5月1日(土)～30日(日)

「土佐への熱き思い」こもる作品群

昭和三十七年六月から四十一年五月まで、産経新聞夕刊に連載し好評を博した司馬遼太郎の「竜馬がゆく」は、今日までに単行本文庫本合わせた発行部数が千八百万部を越えるといわれます。維新史の軌跡と言われる坂本龍馬を主人公にした小説はそれまでにも坂崎紫瀾や千頭清臣の名著があり、それなりに多くの読者を魅了してきましたが、そこに現代性をも加味し、今日に至る龍馬ブームの引き金となった点でも戦後の大衆文学史に大きな足跡を残したといえるでしょう。

また、わが高知県にとって、作家司馬遼太郎は、「竜馬がゆく」をはじめ、「夏草の賦」や「戦雲の夢」、「功名が辻」や「酔って候」と、土佐に取材した多くの作品を手がけ、広く高知県を全国に紹介した功績により、昭和四十三年秋、初の「名誉高知県人」に推挙されました。

勿論、氏の広範な知識と関心は、「峠」で越後の河井継之助を、「世に棲む日日」で長州の吉田松陰や高杉晋作を、そして「燃えよ剣」で激烈な最期を遂げた新撰組の土方歳三を、というふうに土佐に限られたわけではありませんが、随所で語られる、土佐と土佐人についての深い洞察は、たしかに司馬氏の、土佐への愛着と関心の高さを感じさせます。「高知県の人がいいことをすると自分もうれしい」とは、ある講演での氏の言葉です。

司馬遼太郎(1923―1996)

司馬氏は、昭和三十九年八月の高知市夏季大学、同四十八年の文芸講演、同六十年の「坂本龍馬生誕百五十年記念講演」等に、いずれも講師として来高し歴史に残る名講演を行っています。取材等でも高知を訪れることの多かった司馬氏は、土佐人以上に土佐のことを熟知されていたのかもしれません。

また郷土史家平尾道雄氏らとの交友を通じて受けた感化も少なくはなかったことでしょう。土佐史や土佐の人間群像への理解の深さには、我々の方が、かえって教えられることも数多くありました。

人柄にじむ原稿、書、そして絵画

このたび、司馬遼太郎記念財団の特別協力のもと、司馬氏もかつて勤務されていた産経新聞社によって「司馬遼太郎展―十九世紀の青春群像」が企画され、ここ高知でもご覧いただく機会を得ました。司馬氏の初期の原稿から、絶筆となった「風塵抄」まで、作家司馬遼太郎の精魂をこめた直筆原稿も展示いたします。

自筆「長安から北京へ」カバー絵

「小生のように、土佐生まれでもなんでもないのに土佐の人間史を心から愛しているものにとって…」で始まる「わが土佐史への想い」という昭和三十九年の紺インクのみの原稿もあれば、小学校六年国語の教科書にも採られている、あの感動的な「二十一世紀に生きる君たちへ」のような、色鉛筆で推敲の跡を留めた晩年の原稿もあります。

田辺聖子氏宛書簡をはじめ、何気ない書簡からも氏の優しさが伝わってきます。また中国や欧米を旅した折のスケッチなど、彩色してあるものもそうでないものも、独特の気品と味わいがあり、氏の温かみが伝わってきます。自由な境地に遊ばれた書の世界にも「素顔の司馬遼太郎」を感受していただけるのではないかと思います。また、飾らない自然体の司馬氏の写真の数々もご覧いただけます。

魅力ある「十九世紀の青春群像」

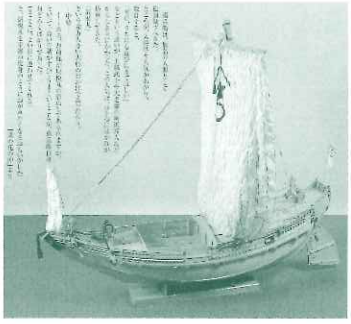
「竜馬がゆく」「坂の上の雲」「菜の花の沖」の三作品は、いずれも産経新聞に連載された名作です。大きく揺れ動く時代の変革の中で、個々の人間の知恵と勇気が試された時代でした。歴史の奔流の中で、困難に対処した人間群像を司馬氏がどう見たか、これらの作品世界を関係実資料等でいま一度、確かめ、考えていただきたいと思います。

司馬氏揮毫の書に

「厚情必ずしも人情にあらず
薄情の道忘るる勿れ

坂本龍馬語録より　司馬遼太郎」

というのがありますが、敢えてこの語を



嘉兵衛最初の持ち船「辰悦丸」の模型
坂口富逸氏蔵

高田屋嘉兵衛奉納「ギヤマンの飾り玉」
青森県深浦町・円覚寺蔵

選び書かれた氏の心中をいろいろと考えさせられます。(その雑記帳に「坂本は策士にして志士なり、中岡は志士にして策士なり」とのメモを遺した坂崎紫瀾のことばも思い出されます。)

さて、**「竜馬がゆく」**コーナーでは、司馬氏も絶賛した、その人間性あふれる、書簡文学の白眉とも言われる坂本龍馬書簡や、坂本家に伝わる和歌の伝統を、もう少し充実して展示紹介が叶えば、と思うところもありますが、この企画のためにご出品下さった各地の貴重な歴史資料にも、じっくりと目を留めていただきたいと思います。

幕長戦争を溝渕広之丞と龍馬の二人で実見して書かれた「下関海戦の図」や、勝利を疑わなかった、吉村虎太郎の大和出陣の朝の家族宛ての書状は、彼らの緊迫した心の昂揚を今に伝えています。

「菜の花の沖」コーナー

淡路島の貧家に生まれ、一介の船頭から北海道函館を拠点に蝦夷・千島の海で活躍する大商人になった高田屋嘉兵衛が南下する大国ロシアとのはざまで人間としての信義を貫き、もつれた日ロ関係を人間と人間の信頼によって解決へ導いていった勇気ある姿が感動を呼びます。

ゴローニン著『日本幽囚記』には、リコルド艦長の手記も収められていて、高田屋嘉兵衛の肖像画に添え《各国それぞれの習慣があるが、…真に正しき事は何れの国を問はず、正しきものと認められる》と記されています。

実物ではありませんが梁川剛一製作の「高田屋嘉兵衛銅像原型」にも嘉兵衛のその高潔な人格がよく表されています。はるばる北海道の北方歴史資料館から海を渡って来た資料です。また高田屋の商用印や愛用の矢立や遠眼鏡もそれを実際に手にして使った嘉兵衛を偲びながら、ぜひご鑑賞いただきたいものです。

「坂の上の雲」コーナー

俳句・短歌の革新を唱え明治文学の世界に大きな足跡を遺した正岡子規、日露戦争の勇将秋山好古、その弟で日本海海戦の名参謀であり子規の親友でもあった秋山真之。この三人の明治の青春を軸に、近代日本にとっての日露戦争の意味を問いかけたこの長編小説も、今なお多くの読者を持つロングセラーとなっています。

今春二月、県立歴史民俗資料館の企画展「郷土史の父、寺石正路の足跡」で寺石正路と子規、真之の興味あるつながりを教えてもらいましたが、土佐の誇る海軍大将、島村速雄(1858―1923)もまた、真之とともに対馬沖で、東郷平八郎の指揮のもとロシア、バルチック艦隊と戦い、さらに真之が大正七年急逝したときは、情誼あふれる追悼講演を行ったという関わりもありました。(先年、中村彰彦著『海将伝』でも紹介されたことでした。)その秋山真之自身が洋上の軍艦を描いた画や、友情あふれる子規宛て書簡も見どころです。

司馬氏がその一文を読み「坂の上の雲」を書くきっかけになったともいわれる高浜虚子の自筆原稿「子規居士と余」も一際光彩を放っています。

子規筆のものでは、明治十六年の「海南新聞の発兌を賀す」もあります。これは当時の土佐の少年たちと同じく、自由民権思想の高まりに胸を熱くした松山の若者たちの姿を彷彿とさせます。そして、子規の死の前年(明治34)に亡くなった中江兆民が『一年有半』を世に出したころの子規の心境を綴った『仰臥漫録』や生前に執筆された「子規の墓誌銘」もご紹介いたします。兆民生前の遺稿として出版されこの著を読んだ、子規の兆民評に辛辣なものがあったのは当然といえば当然かもしれません。

さらに、今回の特別展では、特別展示のほか、映像「司馬遼太郎は語る―日本人とは何か―」(約十二分)も常時上映いたします。また五月十五日(土)には北隣の高知城ホールで記念講演会を開催いたします。演題は「坂本龍馬と司馬遼太郎」で、講師は元産経新聞社大阪代表の渡辺司郎氏です。渡辺氏は産経新聞社時代、司馬氏と親交があり、坂本龍馬を小説に書くよう司馬氏に勧めたことでも有名な方です。

坂本龍馬の実像について新たな見解が発表されるなど話題の多い昨今、渡辺氏の講演が楽しみです。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

(学芸課　別役佳代)

正岡子規(1867―1902)

秋山真之(1868―1918)

秋山好古(1859―1930)

【主な展示資料】

自筆原稿「わが土佐史への想い」
同　「21世紀に生きる君たちへ」
絶筆「風塵抄」、「アメリカ素描」のカバー絵ほか司馬氏自筆絵や書、写真、映画ポスター、お龍所用と伝わる月琴、正岡子規短冊、秋山真之画軸、高田屋嘉兵衛銅像原型、兄権平宛て坂本龍馬書状ほか約200点。

【映　像】

「司馬遼太郎は語る―日本人とは何か」(約12分)を常時上映。

【記念講演会】

日時／5月15日(土)
14時30分～16時
(14時開場)
場所／高知城ホール4階ホール
(文学館北隣)
演題／「坂本龍馬と司馬遼太郎」
講師／渡辺司郎氏(元産経新聞社大阪代表)
定員／200名(当日先着順)※入場無料

学芸員メモ

「智恵子抄」展を終えて

平成11年2月6日から始まった冬季特別展「智恵子抄展」は、3月7日で閉幕となった。会期中実にたくさんの方々に足を運んでいただき、中には二度三度繰り返して見える熱心なファンの方もいた。老若男女さまざまな来館者の姿を見て、「智恵子抄」という作品の普遍性を改めて感じさせられた1カ月だった。

高知新聞の読者からの投書欄にも、何度かこの展覧会についての感想が掲載された。73歳の男性は、青春時代にガールフレンドからこの詩集をプレゼントされ、暗唱できるほど読んだといい、43歳の男性会社員は13歳の頃に詩集と出会い、智恵子のことを「初恋の人」だとしていた。23歳の女子学生は、紙絵を前にして感じた智恵子の内面について書いていた。

年齢や性別を問わず、高村光太郎のこの詩集と、そこで歌われた智恵子という女性の生き方がいまだにこれほど人の心に訴えるものは何なのだろう。昭和16年

展示室内風景

記念講演会「光太郎・智恵子―鮮烈な生の軌跡―」（講師・北川太一氏）

に刊行されたにもかかわらず、その魅力は不思議なほど色褪せない。

講演会講師としてお招きした北川太一先生に、初めてお会いしたときのお話が印象的だった。「みなさんはよく、智恵子さんはどうしてあんな生き方をしたんだろうって聞くんですが、それは反対だと思います。本当は智恵子さんが今私達に、あなた方はどうしてこんな風に生きないのって問いかけているんじゃないでしょうか」。穏やかに微笑まれながら先生はそんな意味のことをおっしゃった。はっとさせられた。智恵子は病に倒れ精神を病みはしたが、それは一つの表に現れた現象であって、内にあったものについて私達は何も知らなかった。考えなかったのかもしれない。

◇

今回の展示の中心になったのが、智恵子が病んでから作った紙絵であった。図録などでその作品を見たことはあったが、初めて実際に目にしたときには本当に驚いた。マニキュア用の先の尖った鋏で、下書きもなしにすらすら切り抜いていったというこれらの紙絵には、どれも、顔を近づけてよく見ないとわからないほどの細かい切り目がたくさん入れられていた。それが離れて見たときにごく繊細な模様の印象になる。洋画家を目指していた素養に裏打ちされた高い計算性と、その内部の素朴な清らかさが画面いっぱいにあふれているのだった。

紙絵は死の間際に精神病院の一室で作られたものだから、正直にいうとどこか悲しいイメージがあった。悲しく美しいものだという先入観である。けれど実際に目にしてみて、それらの本当の意味がわかった。そこには楽しいユーモアさえあった。これらはどれも光太郎への愛の形なのである。色とりどりに、花や果物や魚や模様が歌っているのだと素直に実感した。

これらの紙絵を残して智恵子はこの世を去った。その3年後に「智恵子抄」は刊行された。そこには光太郎が妻・智恵子と出会ってから失うまでが歌われている。

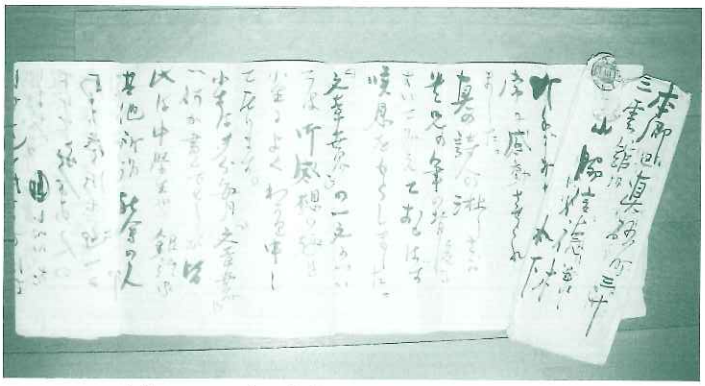
◇

戦後、岩手県花巻市郊外で独居自炊の生活を始めた光太郎は、昭和25年に「智恵子抄その後」という詩文集を出す。「もしも智恵子が」「元素智恵子」「メトロポオル」「裸形」「案内」「あの頃」「吹雪の夜の独白」など、ここに含まれている詩はすべて岩手の山奥で生まれたものである。戦争中に一時途絶えていた智恵子の詩が、晩年を迎えた光太郎の中に再び戻って来たのである。

「智恵子が憧れてゐた深い自然の真只中に／運命の曲折はわたくしを叩きこんだ。／運命は生きた智恵子を都会に殺し、／都会の子であるわたくしをここに置く。（略）智恵子は死んでよみがへり、／わたくしの肉に宿ってここに生き、／かくの如き山川草木にまみれてよろこぶ」（「メトロポオル」抜粋）

この頃に生まれた詩は、普遍的なものとなって自然のそこここにいる智恵子に語りかけるものである。この詩ができた時、光太郎は64歳という年齢だった。

光太郎は、生涯のあらゆる場面で詩を作った。詩を辿っていくと、彼のその時点でのそれぞれの思いがはっきりわかる。「智恵子抄」の詩も、恋愛時代には恋愛の詩、死の時は死を受け止めた詩など、すべてリアルタイムで書かれたものだ。「詩人とは特権ではない。不可避である」と光太郎は言う。彼にとって、詩は内的必然であった。詩人自身の歩みからのみ詩は生まれる。方法論はあっても、文学自体から詩は生まれない。芸術も同じように芸術家自身の絶対の価値観からのみ生まれる。これはシンプルな主張だ



土佐コーナー出品資料　山脇信徳宛 光太郎書簡

が、それだけに揺らぎようのない真理である。光太郎は若い頃から一貫してそう主張し、晩年になっても同じように考えていた。

光太郎が本格的に詩を書き始めたのは、パリでヴェルレーヌやボードレールの詩にふれてからである。それまでは、上田敏ら詩人の詩は立派だとは思うが、何だか血脈のつながりを感じず、別な世界のようにしか感じなかったために書かなかったという。日本に帰って来て、北原白秋、三木露風らの詩を読み、「詩は結局自分の言葉で書けばいいのだ」という結論を得て夢中になって詩を書き始めた。その姿勢は第一詩集の「道程」でも「智恵子抄」でも同じである。「詩は個人という因子から数学のように不可避に開展する。それは計算者の自由勝手を許さない」という光太郎の詩は、生々しいほどの感情の発露だった。

「智恵子抄」の虚構性はよく論じられてきたところである。詩人光太郎が作品の中で完璧な虚構の世界を作り上げ、かつ現実の自分たちをもその中に没入させてみせたという見方である。たしかに、現実生活のほうが作品世界に飲み込まれていくような種類の文学者もいるだろう。しかし、光太郎の場合はむしろ逆である。現実の二人の生活はいまや断片でしか伺い知れないし、勝手に推察すべきではないのかもしれないが、そこからあふれ出したのがあの詩であるということは信じてよいはずだ。光太郎はそういう風にしか詩を作れなかった詩人だからである。時には血を吐くように、時にはいなくなった人を抱きしめるように詩を書いたのだと思う。この詩集を読むとき、私達はそこに並んだ生きた言葉の強さと同時に、詩人自身の生命の輝きを感じずにはいられない。そして、同じことは智恵子の紙絵にも言える。発表を前提に作られたものではなく、光太郎に伝える思いそのものであったからこそ、今それを見る人間の心に訴えるのではないだろうか。

彼らの選んだ道は苛酷な道だった。けれどそこに悲壮はない。あの紙絵がその証だ。智恵子の遺したたくさんの紙絵は、孤高の芸術家たちの道にほのかに灯った暖かい光のように思えてならないのである。

（学芸員　野中佐知子）

特別出品資料　草野心平書「高村光太郎死す」

閲覧室から

『旅涯ての地』

坂東眞砂子　著

『死国』の映画化で話題をさらっている直木賞作家坂東眞砂子氏の十三世紀のイタリアを舞台にした受賞後初の長編小説。元の宮廷から二十四年ぶりに帰郷したマルコ・ポーロ一行の奴隷として連れてこられた宋人と倭人の血をひく夏桂。彼は磔刑されたキリストの血を受け、死者をも甦らせる力を持つという〈聖杯〉を探し求めるローマ教会と異端カタリ派の争いに巻き込まれたことから、謎の女マッダレーナ一行とともにカタリ派の本拠地〈山の彼方〉を目指し逃亡の旅に出る。ローマ教会のいう〈聖杯〉とは実はカタリ派の教義を証拠立てるはずの『マリアによる福音書』であったが、そこに書かれた"真実"は〈山の彼方〉教団を大きく動揺させ崩壊に導く…。

中世の正統と異端の対立を背景に何者にも帰属できずその魂を引き裂かれた〈境を歩む者〉夏桂と信仰に魂の安らぎを求める〈善き人〉マッダレーナとの葛藤と愛によって魂の救済の謎が解き明かされる。

（角川書店、1998・10・31発行、¥1、900＋税）

県内同人誌紹介

創作　草の葉

昭和三十九年、小谷みか子さん（故人）がある席で、県内に住む名もない女たちで、女が見る世の中や考え方、恋愛などを、自由に書いた本を出そうじゃないかと、呼びかけた。数カ月ののちそれが実って、創作集同人誌「草の葉」が誕生した。

アメリカの自由詩人、ホイットマンの詩集「草の葉」にあやかったものと思う。

一年に一集を出すのが決まりである。四十三年の間には、去って行った人、新しく入ってくる者、いろいろの過程があるが、小篇、短詩型のものなどを載せて、細ぼそ続け初版から第四十三集まで、一度も休刊をしたことはない。

平成十年末に第四十三集を発行

同人　十二名

編集発行　南部典代

連絡先　高知市朝倉本町二―七―五　南部典代

電　話　〇八八・四四・四二三三

土佐文学さんぽ 3

「過ぎゆきの歌」

上林 暁

河田三郎の隔離小屋の歌は、深い印象を留めた。彼は田舎に埋れてゐるけれど、文学を本職としてゐる自分などよりもはるかに才能に恵まれた男だと畏れぬわけにはゆかなかった。私はその後郷里に帰省した折、その隣部落の古い学校友達をつかまへて、河田三郎とはどういふ男かと尋ねたことがあった。頭のいい男だといふ答へだった。しかし胸を病んでゐると、友人は顔をしかめた。

上林暁のふるさと　大方町下田ノ口蠟瀬川河口

昭和30年3月下旬、上林は七年振りに、大方町下田ノ口の生家に帰った。脳溢血で倒れて三年目の春、まだ禁酒中の身であった。それでも、地元の講演会や足摺岬への旅などを試みていたのだから、回復は順調だったようだ。四月上旬、友人と共に上林を初訪問した植田馨さん（大方町在住、73歳）に上林は、「過ぎゆきの歌」の主人公となる川村八郎（一九二〇～一九五五）のことを尋ねている。それというのも、地元の歌誌「飛魚」に載った八郎の短歌にこころ魅かれていたからだ。

父母と来て病養ふ山小屋に戻りの早き秋の陽を見ぬ
過ぎゆきはなべて寂しと雨後の下駄にはりつく花びらを剥ぐ
新聞紙にうけし血汐の花のごとき紅きは見つつ心極まる

大正九年、大方町上田ノ口小字羊歯谷に生まれた八郎は、昭和十三年結核を発病、以後、生家近くの隔離小屋で療養を続けていたが、昭和三十年、国立徳島療養所で死去。幸いというべきか、死の一カ月前に、ガリ版刷りの歌集『二つの石』が、枕元に届けられていた。上林に注視され続けた八郎は、薄幸の歌人のイメージとは裏腹に案外デカダンス振りを発揮しており、隔離小屋を訪れる女性も少なくなかった。親友植田さんは「愛の歌は、それぞれ相手が違っていたようです」と、その情熱と茶目っ気をなつかしがる。ところが、清子（妻）という女性にめぐり逢ってからというものは、死と愛を織りまぜた短歌づくり一筋の道を歩むことになる。

表題となった『二つの石』は、中村市の一条神社前でひろった二つの石を、後年ふたりが結ばれた時に（清子の両親は猛反対であった）重ね合わせて一つにしようという、ふたりの祈願をこめたものであった（事実、この純愛は、徳島の療養所において婚約というかたちで成就し、二つの石は、療養所内の土中深く埋められた）。

上林の帰郷時、八郎は既に、起坐不能の重態に陥っていた。病床から植田さんに届けられた約三十通の手紙が「あらくさ」（幡多短歌会）に連載され、「過ぎゆきの歌」（昭和32年「新潮」六月号）の基になったのである。

ただこの小説に先駆けること半年、上林は「短歌芸術」一月号に、『二つの石』についてのエッセー「世に知られない小さな歌集に寄せて」を発表している。通常の生の営みの埒外にありながら、歌と愛に自らの生を存分に解き放った八郎の短い生涯にただならぬ関心を抱いた上林は、たった半年で、小説として昇華したのである。私小説の鬼、上林の気概がうかがえるというものだ。

「名もなき小さな命」の谷間

上林の生家から西方へ三キロ、国道から少し奥まったところに、羊歯谷がある。朝に夕に中村中学へ通った上林が「子供心にも馬鹿にしていた」のもなるほどとうなずける寂しいたたずまいである。十軒ぐらいの家が飛び飛びに奥へ吸い込まれている集落をみつめているこちらに、二月の凍てた風が吹き過ぎて行く。折から、谷の奥からバイクを飛ばしてきた初老の男性は饒舌だった。「八郎が結核で死んだことは知っちょります。けんどあの頃は、一世帯に一人は結核にかかっちょりました」と驚くべきことを滔々と述べ立てるのであった。

上林は、こんな小さな谷間に生を享けた歌人に「名もなき小さな命」を発見、滋しんだのである。

（フリー編集者　国則三雄志）

見どころ＝●大方あかつき館（上林暁）●入野松原●花卉団地●ホエールウオッチング

交　通＝JR高知駅より土佐入野駅下車。特急一日九本。一時間四〇分。

資料受贈報告

（平成十年十二月～平成十一年二月）

敬称略

▼**横山隆一**・自作「久米正雄ブロンズ像」一点▼**稲垣敏行**・「稲垣積代ゆかりの一絃琴」一式▼**妻鳥季男**・生方たつゑ「結氷もちかづきてこむ」軸、書簡、短冊、紺染め抜布他香川進、酒井黙禅、前田夕暮、吉井勇資料六十八点▼**濱田登美**・田中貢太郎句額「文字摺の石は」一点、田中貢太郎著『貢太郎俳句集』他刊本三点▼**津野輔猷**・田岡嶺雲著『数奇傳』他刊本六十三点▼**近森律子**・秋沢久寿栄著『一絃琴日記』他一点▼**井上孝夫**・平出修研究刊行会編『平出修研究29集』他刊本一点▼**窪田善太郎**・自著『山の子三郎』他五点▼**柴田香**・浜田知章『リアリズム詩論のための覚書』他刊本二点▼**宮崎道**・自著『歌集・佐賀漁港』二点▼**金子晋**・編『泥―永田耕衣書画作品集―』他刊本一点▼**三文々司**・高橋巌『高橋巌回顧』他刊本一点▼**野口光彦**・自著『檜葉に積む雪―野口光彦歌集―』▼**橋本正義**・自著『句集・雁渡し』▼**池知つたえ**・自著『あびらこの歌』▼**吉川朔子**・自著『詩集・それた銃弾のあとで』▼**古味良男**・笹松三郎著『二百円のサイフ』▼**山本衛**・自著『くぎをぬいている―山本衛詩集―』▼**佐藤寿良**・自著『（続）ある海援隊士の生涯―白峰駿馬伝―』▼**橋本嘉子**・平中歳子著『歌集、瓔珞』▼**森下一仁**・自著『現代SF最前線』▼**今西英次**・濱本浩著「田螺の殻」初出『オール讀物』十巻十号▼**草の葉同人**・自著『創作集・草の葉43集』▼**引鶴高知支部**・編刊『涛光―引鶴高知支部合同句集I―』▼**高知県俳句連盟**・編刊『土佐俳句歳時記』▼**大原富枝文学館**・大原富枝著『ふるさとの丘と川　大原富枝年譜』他刊本一点▼**横倉山自然の森博物館**・編刊『横倉山の森』他刊本一点▼**講談社**・編刊「日録20世紀1902」二巻三十九号他雑誌一点▼**飛鳥企画**・角川書店刊『女性作家シリーズ9』他刊本三点▼**文藝春秋**・小山慶太著『自画像の中の科学者』

◆◆◆文学館日誌　1998年12月～1999年2月◆◆◆

12月

◆3日　江の口養護学校来館◆4日　ディサービス土佐、高知大付属中学校来館◆8日　ミニ企画「土佐の一絃琴―一絃琴に魅せられた人々―」を常設展示室内にコーナー展示（一月二十四日まで）。一絃琴の名演奏者、稲垣積代氏も愛用された一絃琴と秋沢久寿栄氏の一絃琴を展示するとともに、一絃琴の歴史等紹介。同日丸の内高等学校来館。◆11日　大東会（大阪）来館◆12日　第四回文学カレッジ徳島文理大学教授　高橋正氏による「大町桂月人と文学」。◆13日「ヴィジョネール・片山敏彦の世界」展閉幕。期間中の総入館者は約二〇〇〇名。◆17日　高知こどもの文化応援隊、高知県立文学館共催の「こどもと絵本の一〇〇年展」開幕（2階企画展示室にて。入場無料）。◆24日　県立図書館主催「クリスマスお話し会」開催。◆26日～　一月一日まで休館。

「こどもと絵本の100年」展　新春記念講演
演題「こどもと絵本の100年」
講師　聖和大学教授　鳥越信氏

「こどもと絵本の100年」展　会場風景

ミニ企画「一絃琴と土佐」(12/8～1/24)

1月

◆9日　第五回文学カレッジ詩人の猪野睦氏による「タカクラ・テル―人と文学―」。◆10日「こどもと絵本の一〇〇年展」記念講演会「こどもと絵本の一〇〇年」開催（文学館ホール）。講師は聖和大学教授・（財）大阪国際児童文学館理事　鳥越信氏。参加者約九十名。◆15日「土佐一絃琴と文学　演奏と朗読のつどい」開催。近森律子氏による「須磨」「漁火」「土佐の海」の一絃琴演奏と、松田光代氏による、今東光作「一絃琴」、宮尾登美子作「一絃の琴」、田宮虎彦作「土佐日記」の朗読を鑑賞。参加者約八十名。◆16日　追手前小学校来館。◆17日「こどもと絵本の一〇〇年展」閉幕。期間中の入場者は約一八〇〇名。◆19日　南国市老人高齢者教室来館。◆20日　潮江女性学級来館。◆23日　香我美町にて岡本弥太生誕一〇〇周年記念式典および生誕地碑除幕式。当館からも出席。

「土佐の一絃琴―演奏と朗読の集い」(1月15日)
演奏の近森律子さん（右）と朗読の松田光代さん（左）

2月

◆3日　姫路文学館友の会大雪の中来館。◆6日「智恵子抄展」開幕。「高村光太郎作品朗読会」開催（文学館ホール）。松田光代氏、河添彬氏、野中久美子氏による詩の朗読。あわせて高村規氏より借用したスライド写真も上映。参加者約一〇〇名。◆11日、12日　第三回土佐菜の花忌記念、一九七〇年東宝作品「幕末」上映会。関連資料のミニ展示も。両日で約二〇〇名の参加者あり。◆十二日　城西中学校来館。◆13日　第六回文学カレッジ　国文学者　浜田清次氏による「鹿持雅澄の学問と芸術」。◆14日「智恵子抄展」特別記念講演会「光太郎・智恵子―鮮烈な生の軌跡―」開催（文学館ホール）。講師は文芸評論家・北川太一氏。晩年の光太郎に親しんだ北川氏が、光太郎と智恵子の生と二人の生きた時代、目指した芸術などについて講演。参加者約一六〇名。◆17日　小津高等学校来館。◆18日　東工業高等学校来館。県建築士会来館。◆21日　甲浦観光、仁淀村婦人会来館。「智恵子抄展」前期終了。智恵子紙絵作品のみ、代表作を残しほとんどを展示入れ替え。◆23日「智恵子抄展」後期開始。◆26日　和田寿美代子氏（田中英光従妹）来館。◆28日　松尾徹人高知市長夫妻来館。

第３回土佐菜の花忌記念「幕末」上映会。解説の星加敏文氏。（２月12日）

お知らせ

◆第2回児童生徒朗読コンクール

県立文学館では、声を出して朗読することによって文学の楽しみをさらに深めてもらえればと、児童生徒朗読コンクールを開催いたします。実施要項、参加申し込みについては次の通りです。

■対象
県内の国公私立の小・中学生による個人朗読。1校3人以内を学校より推薦。

■実施予定日（安芸・大方は変更の場合あり）
①地区予選／
※8月13日（金）（高知会場／県立文学館）
8月18日（水）（安芸会場／働く女性の家）
8月20日（金）（大方会場／大方あかつき館）
②最終審査／地区予選を通過した児童生徒による本選。公開審査及び表彰式。あわせて記念講演会（講師未定。昨年は絵本作家の田島征彦氏でした）も予定しています。
※11月7日（日）（県立文学館）

■朗読作品（制限時間：小学校4年生までは2分以内、5年生以上中学生は3分以内）
①地区予選／高知県出身の近現代の作家、または高知県を場面とした文学作品（童話、絵本を含む）
②最終審査／地区予選で朗読した以外の文学作品（教科書掲載作品も含む）

■参加申し込み
（締め切り／7月6日（火）消印）
1、学校名（校名ゴム印等）、学年、参加児童生徒氏名（各校3名以内）、指導者名、朗読作品名及び作者名を明記の上、県立文学館まで郵送して下さい。
2、作品の朗読部分のコピーを添付（7月31日（土）までに後送でも可）

高知県立文学館ニュース　第四号　平成十一年四月一日発行　〒七八〇―〇八五〇　高知市丸ノ内一丁目一番二〇号　電話〇八八―二三―〇二三一　FAX〇八八八―七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

1999年

4～6月

	4月――April	5月――May	6月――June

常設展示

ミニ企画展　［『龍袍』中国へ…湯山愧平展］（4月18日まで）

戦前に中国で暮らした高知の文学者・湯山愧平の家に伝わる清朝皇帝の服"龍袍"（ロンパオ）が５月に中国・張作霖記念館に、愧平詩集「一壷春詩片」が江首席に寄贈される。その記念展。日中友好を願った湯山愧平の文学活動をあらわす資料や、めぐる人々を紹介。

催しもの

司馬遼太郎展プレ企画

＜映画「燃えよ剣」上映会＞

原作：司馬遼太郎『燃えよ剣』
監督：市村泰一
出演：栗塚旭、内田良平、和崎俊也ほか
（昭和41年、松竹、モノクロ91分）

＊日時／4月10日（土）
13時30分～
＊場所／文学館ホール
＊入場無料、定員100名

臨時休館のお知らせ

４月28日（水）
次回特別展準備のため臨時休館となります。ご協力をお願いします。

'99専門講座〈田中英光〉

田中英光
（1913～1949）

現代文学において鮮烈な印象を残す青春小説の代表作『オリンポスの果実』。オリンピック選手にして作家という異色の経歴を持つ現代作家・田中英光の衝撃的な死から、今年で50年となります。
文学館ではこの秋その企画展を開催するにあたり、英光の人と文学をテーマに５回シリーズの専門講座を行います。英光の生きた時代や、彼の心酔し、師事した太宰治との関わりなどについても学びます。

▶申し込み方法（～5/16まで消印有効）◀
ハガキに住所・氏名・ＴＥＬ番号を明記の上、文学館『専門講座 受講希望』係まで。
電話での受け付けは致しません。

▶定員（5回シリーズ）◀
50名。定員になり次第締め切ります。

'99専門講座〈田中英光〉①

専門講座は毎月第3土曜日、13：30～15：00まで開催。
（6/19、7/17、8/21、9/18、10/16の全５回シリーズ）

●シリーズ第１回
＊日時／６月19日（土）
13時30分～15時
＊場所／文学館ホール
＊講師／高橋正氏
（徳島文理大学教授）

特別企画展

名誉高知県人第１号、土佐を愛した国民作家「**司馬遼太郎展―19世紀の青春群像―**」

５月１日（土）～30日（日）

（初日のみ午前10時開館）
入館料　500円
休館日：6（木）、10（月）、17（月）、24（月）

特別展示のほか映像「司馬遼太郎は語る―日本人とは何か」（約12分）も常時上映。

記念講演会　入場無料
◆日時／５月15日（土）14：30開演（14：00開場）
◆演題／「坂本龍馬と司馬遼太郎」
◆講師／渡辺司郎氏（元産経新聞社大阪代表・前大阪市教育委員長）
◆場所／高知城ホール4階ホール（高知市丸ノ内2-1-20　TEL22-2035）
◆参加／定員200名（当日先着順）

【休館日】４月――５，12，19，26，28　　５月――６，10，17，24，31　　６月――７，14，21，28

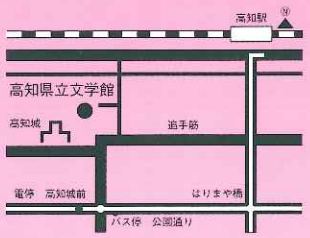
夏の特別展予告　「石川啄木展」　８月３日（火）～９月19日（日）

貧困の中で、故郷渋民村から函館・小樽・釧路へさらに東京へと流浪しながら、文学に命を燃やし、短い26年の生涯を鮮烈に生きた天才詩人石川啄木。本展は「一握の砂」「悲しき玩具」などの歌集や「あこがれ」をはじめとする詩集など、啄木の文学の軌跡をたどり、知られざるその人間像に迫ります。

利用案内

開館時間　午前９時～午後５時（入館は、午後４時30分まで）
休館日　毎週月曜日（休日・祝日の場合はその翌日）
年末年始（12月26日～１月１日）
観覧料　一般300円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。
20人以上の団体は２割引。高校生以下、高知県長寿手帳所持者及び身体障害者手帳（１・２級）療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者１名は無料です。
駐車場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●ＪＲ高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩4分
●バス停公園通り下車北へ徒歩4分

高知県立
文学館
高知市丸ノ内１丁目１－20
電話　0888・22・0231
FAX　0888・71・7857
〒780-0850